

文化財への再認識を促す総合的な学習の時間の開発 —臼杵石仏を題材として—

23A1013 平嶋 拓人

要旨

本研究の目的は、身近な文化財が失われる危険性を児童が理解し、文化財の保護について必要性を見出す手立てが、児童の学びをどのように深めていくのかを、明らかにすることにある。そこで、大分県臼杵市に所在する臼杵石仏を教材として、(ア)身近な文化財と失われつつある文化財の比較、(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習、という2つの手立てを講じた総合的な学習の時間の開発と実践を行った。(ア)の手立てを通して、比較によって具体的なイメージを持つことができ、身近な文化財が残らなかった可能性を想定できるようになる可能性があることがわかった。(イ)の手立てを通して、先人の保護・保全の取り組みの思いや選択を知ること、保護・保全に対する自分の視点を持ち、考えを深めることができるようになる可能性があることがわかった。

【キーワード】 文化財保護、総合的な学習の時間、石仏、地域教材

1. はじめに

(1)文化財について

文化財とは、我が国の歴史における様々な時代背景の中で、人間の生活との関わりにおいて生み出され、現代まで守り伝えられてきた国民の財産である。つまり、文化財は恒久的な存在ではなく、失われる可能性もあったが、人々が守ってきたことで現代まで残ることができたものだといえる。文化財が残ったおかげで、我々は国や地域の歴史、人々の生活を学ぶことができる。次の世代も同様に、学ぶことができるようにするためにも、文化財を保護して、滅失や散逸を防ぎ、長く継承していく取り組みを今の世代が行っていく必要がある。

(2)学校教育との関係

文化財の保護に関わる取り組みは、学校教育の中でも行われてきた。森屋(2019:60)は学校教育と文化財保護の関わりについて、小・中学校の学習指導要領の内容から「文化財は社会科の教材として扱われるとともに、戦後の学校教育では、その保護を志向する教育が意図されていたことがわかる」と述べている。現行の小学校学習指導要領解説社会編(2017)を見ると、第4学年と第6学年で文化財の保護について学習する場面が設けられている。例えば第4学年の「県内の伝統や文化、先人の働き」では、文化財や年中行事は地域の人々が受け継いできたことや、様々な願いが込められていることを学習する。その中で、人々の願いが込められ、受け継がれていることを理解するとともに、伝統や文化の保護・継承を実現してくためにともに努力し、協力しようとする意識を養うことが目指されている。

また、総合的な学習の時間でも、文化財の保護を題材とした学習が行われている。総合

的な学習の時間で設定する探究課題の参考として、3つの課題とこれに対応した探究課題が例示されている。3つの課題のうちの1つが、地域や学校の特色に応じた課題であり、この課題について文部科学省(2021:67)では、以下のように記載されている。

地域の伝統、文化、行事、生活習慣、経済、産業などにかかわる、各地域や各学校に固有な生活上の諸課題のことである。そのいずれもが、よりよい郷土の創造にかかわる課題である。地域社会に生きるすべての人が、その地域ならではのよさに気づき、問題点を自分のこととして受け止めるとともに、日々の生活の中で自己の生き方との関わりで考え続け、よりよい解決を目指して行動することが望まれる。

これを踏まえ、様々な学校では、地域の伝統文化や文化財の継承を題材とした、総合的な学習の時間の授業が構想・実践されている。中でも、世界遺産が所在する自治体の学校では、世界遺産教育として文化財の保護の在り方を考えさせる学習が実施されることも多い。

世界遺産教育は、「世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという責任感、そのために何ができるかという実践的なスキルなど、トータルな教育を目指している(田淵・中澤, 2007:60)」。その題材には、世界遺産に登録された物件に限らず、地域の文化財や豊かな自然なども活用可能であるとされている(國竹, 2017:23)。世界遺産が所在しない地域での世界遺産教育について、中澤・田淵(2006:153)は「地域の文化遺産を通して、文化遺産の価値やかけがえのなさを理解させ、それを次世代に伝える権利と義務があるという自覚を育むことは可能であろう」と述べている。このことから、世界遺産を用いた授業の知見は、地域の文化財を用いた授業への援用も可能だといえる。

(3) 課題

文化財の保護の意識を持つためには、保護の取り組みによって、文化財がきれいな姿で残ることができることを理解しておく必要がある。文化財は、開発・戦争・自然災害・風化などの要因によって失われるものも多い。上記の通り、数百年前の文化財が現代社会に残っていることは、当たり前のことではなく、人々の保護があつてこそのものである。しかし、田淵・中澤(2007:61)は、「子どもたちにとって、地域の世界遺産は、日常生活に溶け込んだ『余りにも当然な存在』」だと述べている。つまり、児童は、身近にある文化財をあつて当たり前の存在と思っており、失われるものとは思っていない。そのため、文化財に興味・関心を持ち、関わろうとする意識を、児童は持ちにくいのではないだろうか。田淵・中澤の言説を踏まえれば、文化財の姿や価値が損なわれてしまう危険性を児童が理解し、文化財の保護について必然性を見いだす手立てを講じる必要がある。

そこで本研究では、身近な文化財が失われる危険性を児童が理解し、文化財の保護について必要性を見いだす手立てが、児童の学びをどのように深めていくのかを、身近な文化財を教材にした総合的な学習の時間の実践と、そこで得られた児童の記述等をもとに明らかにしたい。

2. 文化財の保護の意識を育む学習活動

文化財の保護の意識を育てるためには、身近な文化財が失われる危険性に気づく必要があると述べた。これまで行われてきた文化財の保護の意識を育む学習活動の中でも、該当する手立てが行われてきた。それら先行研究を参考に、ここでは2つの手立てについて述べる。

(1) 身近な文化財と他の文化財との比較

身近な文化財が失われる危険性を児童が理解するためには、残っていることが当たり前ではないと気づかせるための手立てを講じる必要がある。

このような手立てを講じた授業は、先行研究において複数見られる。田淵・中澤(2007)では、環境破壊や景観破壊によって、危機遺産に登録された世界遺産を調べ、登録された理由について討論する時間を設けた授業を構想している。祐岡・中澤(2012)は、法隆寺を教材にした授業の中で、地震や火事などで木の建造物が失われた事例を考えさせ、木造建築が破損・焼失しやすいものであることを学ぶ場面を設けている。これらの先行研究では、実際に価値が損なわれているもの、過去に失われたものを教材にするという手立てを講じ、文化財が失われる可能性に気づかせようとしていた。

児童は、普段は現存する文化財しか見ることができないため、失われる可能性について実感を持って考えることが難しい。比較対象を提示し、身近な文化財を相対化させることで、児童は文化財の中に「残ることができたものとそうでないものがある」と気づくことができる。これにより、身近な文化財は、残ることができた文化財であると気づき、身近な文化財も比較した文化財と同様に失われる危険性があると想定できるようになる。

しかし、上述の先行研究においては、すでに失われ、見比べることができない文化財が扱われており、過去の資料や失われた痕跡を示すにとどまっている。そのため児童は、実感がわかず、失われるという危機意識や文化財が地域にあることが当たり前ではないという気づきを得にくい。

このことを踏まえ、教材の選定には十分留意する必要がある。例えば、きれいな姿をとどめたものと価値が損なわれたものを、児童が見比べて判断できるように、完全に失われてしまった文化財ではなく、失われつつあるものを選ぶことが挙げられる。また、見比べて違いを知覚できるような資料を準備できるものであることや、失われつつある文化財と同様の事例が、身近な文化財にも起こることだと理解しやすくするために、比較する文化財の素材や種類などが共通しているものであることも挙げられる。

(2) 文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習

保護・保全の取り組みがなければ文化財が失われてしまう、ということに気づかせるためには、人々がどのように文化財に関わり、受け継いできたのかを知ることが有意義である。実際に、文化財とこれまでの人の関わりについて知ること、なぜ今の姿で残ることができたのかを学ぶことができる。

こうした人の関わりを題材として学ぶ際には、「先人たちのように、私たちも文化財を保護・保全するべきだ」という認識を教条的に伝達することがないように授業設計をしていくことが重要である。先人たちの保護・保全の取り組みが重要なものだとしても、児童らがそれを無批判に受け入れてしまえば、本当に保護の意識が育まれたとはいえない。

らである。

人が文化財の保護・保全にどのように関わったのかを学習する先行研究や実践は、多く見られる。例えば、新宮・中澤(2023)は、東大寺の大仏を教材にした授業の中で、大仏殿が2度の戦乱による被災で焼けてしまったことに触れている。また松岡ほか(2014)は、世界遺産の宮島を教材に、宮島が観光によって持続してきたものであると学習する授業を行っている。これらの先行研究を見ると、多くが「先人たちがどのようにして保護・保全に取り組んだか」を学ぶことが多く、「なぜ保護・保全の取り組みをすることに至ったのか」という点にフォーカスしているものは少ない。先人たちが、どのような思いで文化財の保護・保全をするに至ったのかを知ること、その取り組みの必要性に気づくことができる。

3. 授業開発

前章で述べた事柄を踏まえ、具体的な教材の検討と授業実践の構想を行う。本研究では、多様な文化財の中から、磨崖仏を題材とした授業を構想した。

(1)教材の検討

大分県内には多くの石造文化財があり、その種類も豊富である。中でも、磨崖仏は他の都道府県と比べて多く所在しており、大分県教育委員会(2021:36)では、石造文化財の中でも特筆すべき文化財として挙げている。磨崖仏とは、自然に露出した崖の岩肌を直接彫り込んで作成された仏像のことである。不動産という特性上、つくられてから現在まで、管理する人がいなくなっても、その場にあり続ける。そのため、守り伝えられてきれいな姿をとどめたものがある一方、守る人がいなくなり風化等による劣化がすすみ、輪郭を確認できる程度になったものも見られる。

今回授業実践を行った小学校の校区内に磨崖仏は存在しないが、校区外に臼杵石仏が所在する。臼杵石仏とは、平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫刻されたとされる、4つの石仏群の総称である。規模と数量、彫刻の質の高さにおいて高く評価されており、全国で唯一国宝に指定された磨崖仏であり、市の代表的な文化財となっている。校内には、臼杵石仏を描いた絵やステンドグラスが置かれている。また、市の観光PRキャラクター(「ほっとさん」)のモデルにもなっており、このキャラクターを、校区内や校内の様々なところで目にすることができる。そのため、実践校の児童にとって身近な文化財となっている。

(2)失われる危険性に気づかせるための手立て

本節では、前章で述べた2つの手立てを参考に、(ア)身近な文化財と失われつつある文化財との比較と、(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習の2つの手立て取り入れた、磨崖仏を題材とした授業実践について述べる。

(ア)身近な文化財と失われつつある文化財との比較には、臼杵石仏と大分県の実市に所在する磨崖仏(以下「磨崖仏X」という)を用いた。磨崖仏Xは、劣化が激しく、かろうじて輪郭をとどめている状態の磨崖仏である。また、写真から凹凸を確認することが難しく、他市にあり直接観察することも難しいため、三次元モデルを活用し、磨崖仏の凹凸を捉えられるようにした。また、臼杵石仏の三次元モデルも用意することで、2つの文化財を見比べることができるようにした⁽¹⁾。これらの教材をもとに2つの磨崖仏の比較を行うこと

で、現存することが必ずしも当たり前のことではなく、臼杵石仏もこの先失われる可能性があることに気づくことができると考えた。

(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習には、臼杵石仏の仏頭問題の事例を用いた。臼杵石仏は約半世紀前までは、風化や自然災害による劣化が激しく、体や頭部の損壊や剥落が起きていた。中でも古園石仏⁽²⁾大日如来は頭部が落ちた姿が有名で(資料 1①)、現在も土産物に頭が落ちた石仏をモチーフにしたものが見られるほどである。1957 年から 3 期にわたって保存修理工事が行われ、第 2 期の保存修理工事で仏像の復元が行われた。この際、古園石仏の頭部を復元するか否かなどといった保存の在り方について、地域住民をはじめとして県民の意見が大きく分かれることとなった。そのため、当時の新聞にも臼杵石仏の仏頭問題として多く取り上げられていた。最終的には古園石仏の頭部の復元が行われ、現在はつくられた当時に近い姿となっている(資料 1②)。授業ではまず、頭の落ちた臼杵石仏の写真や 30 年前の新聞記事、動画を題材として、昔はボロボロであり、修理によって今の姿になっていることを伝えた。さらに、保存の在り方について復元保存に賛成する立場と現状保存に賛成する立場に分かれて地域住民の間で論争になっていたことを伝えた。その上で、当時の新聞記事を手がかりに、双方の思いや主張を知り、自分の主張を考え、「現状保存派」と「復元保存派」に分かれて討論会を行った。これにより、文化財の保護・保全の在り方は 1 つではないことや、人々の様々な思いや選択によって、今の姿で保護・保全されていることに気づくことができると考えた。

これらの手立てを講じることによって、文化財がそこにあって当然のものではなく、失われる可能性があるものであり、人の関わりによって現在の姿として残っているものであると気づかせることができる。

4. 授業の実際

(1)単元の構想と分析の方法

前述の手立てを踏まえ、臼杵市立 A 小学校の第 6 学年を対象に、2024 年 6 月 6 日から 10 月 3 日にかけて 15 時間の授業を行った(資料 2)。1 つ目の手立てである、(ア)身近な文化財と失われつつある文化財との比較は、3 時間目に写真と三次元モデルを用いて、臼杵石仏と磨崖仏 X を比較する場面を設けた。2 つ目の手立てである、(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習は、8 時間目から 10 時間目にかけて臼杵石仏の仏頭問題を題材に、当時の人々の視点から文化財の保護について考える場面を設けた。

本実践によって、失われる危険性に気づかせるための手立てが、どのような学びを生むのかを明らかにする。なお、同一の指導案を用いて複数学級で実践を行ったが、学習の展開は学級によって異なるものであったため、本稿ではこのうちの B 学級(児童数 26 名)を分析の対象とした⁽³⁾。

(2)「(ア)身近な文化財と失われつつある文化財の比較」についての分析

児童がどのような学びを得たかを、3 時間目の児童の記述と授業の様子から分析する。

①磨崖仏の比較を行った児童の様子

まず、授業の中で比較を行った際に、児童の中で何が起きていたかを分析する。比較を行った際の、児童の発言に着目した。最初に磨崖仏 X の写真を見た印象を問うと「跡」「な

にこれ」といった発言が得られた。次に、三次元モデルを見せて印象を問うと「3 つ見える(仏像)」「人の形が見える」「ボロボロ」といった発言が得られた。最初は何かがあったようだと思いを受けており、三次元モデルを見ることで詳細をつかみ、仏像が彫ってあるが現在は損傷が激しいと認識したと考えられる。これに対して、臼杵石仏に対しては「形がちゃんと残っている」などのように外観の印象についての発言が多く見られた。

②共起ネットワークの比較

授業を経て、クラス全体でどのような変化が生まれたのか分析する。3 時間目と前時の 2 時間目の最後に実施した、「どうして 1000 年もの間、臼杵石仏は残ることができたのだろう」という共通の問いに対する児童の記述を用いた。児童の変化を多角的に見取るとともに、共通の問いに対する記述の変化の傾向を見取するため、テキストマイニングソフトである KHcoder (樋口, 2004) で作成した共起ネットワークを活用した。児童全員の記述データから作成し、比較を行った。共起ネットワークとは、文中でよく一緒に使われている言葉同士を線でつなぎ、図化したものである。特につなぐりの強い言葉はグループ分けされ、サブグラフがつくられる。共通の設問に対する、共起ネットワークの図とサブグラフを比較することで、(ア)の手立てを通した児童の変化を明らかにする。共起ネットワークの分析については、伊藤ほか(2023)を参考とした。

2 時間目、3 時間目ともに、最小出現数を 3 にして共起ネットワークを作成した。2 時間目は、3 名の欠席者を除く 23 名の記述をもとに作成し、2 つのサブグラフが得られた(資料 3)。これらのサブグラフから、臼杵石仏が残った要因についての記述は、1)人々が大切にしたから(例:臼杵の人が大切にしたから)、2)つくり方のおかげ(例:丈夫に作ったから)、という内容で構成されていた(資料 4)。3 時間目は、2 名の欠席者を除く 24 名の記述をもとに作成し 4 つのサブグラフが得られた(資料 5)。1)人々の取り組み(例:地域の人大切にしてきたから)、2)壊れても直して残った(例:壊れたら、修理したりして守ってきたから)、3)素材やつくり方(例:頑丈な岩や石でできているから)、4)名前からの連想(例:磨崖仏の磨は、磨くと一緒なので地域の人が磨いたりしていた)、の内容から構成されていた(資料 6)。

共起ネットワークの図を比較すると、2 時間目に比べ、3 時間目の図の方が、単語の種類が増加し、表現に富んでいる。また各サブグラフを比較すると、人の関わりに関連するサブグラフが、2 時間目では 1)人々が大切にした、のみであったのに対して、3 時間目では 1)人々の取り組み、2)壊れても直して残った、の 2 つが得られた。また、2 時間目では 2)つくり方のおかげというサブグラフが得られたが、これに素材についての言及が加わった 3)素材やつくり方というサブグラフが 3 時間目では得られた。

これらのことから、クラス全体で使われた単語の種類やサブグラフの増加など、記述の変化が起きていると考えられる。これは、児童の記述の内容が具体化されたためだと思われる。

③児童の記述の比較

②の分析から考えられた記述の変化の具体を、個別の児童の事例から把握するために、抽出した児童の 2 時間目と 3 時間目の記述を比較し、分析する。2 時間目の共起ネットワークから得られた 2 つのサブグラフのうち、1)に含まれる記述をした児童の方が多く見られた。そのため、1)のサブグラフに含まれる記述をしていた児童 2 名と、2)のサブグラフ

に含まれる記述をしていた児童 1 名の計 3 名の児童(a, b, c)の抽出を行った(資料 7)。

a 児は、どちらの記述でも、人の関わりが関係していると予想している。しかし、関わり方の記述については違いが見られる。2 時間目の記述では「大切にした」と状態を表す抽象的な記述である一方、3 時間目の記述では「修理した」「守った」という、行動を表す具体的な記述になっている。具体的な行動について想定することができるようになったのは、残ることができなかった場合のイメージを持つことができたためだと思われる。b 児は、どちらの記述でも、地域の人の関わり、特に守ってきたことが関係していると予想している。しかし、3 時間目の記述では、どうやって守ってきたかについて、「直す」という行動をより具体的にした表現が使われている。a 児と同様に、具体的なイメージを持つきっかけがあったためだと思われる。c 児は、2 時間目の記述では、人々の関わりと頑丈につくったことが関係していると記述している。3 時間目では、つくり方のみに焦点をあてた記述をしており、修理が必要なくなるからという理由まで書かれていた。このことから、3 時間目の授業を通して、臼杵石仏は壊れていないというイメージを持つきっかけがあったことで、自分の考えに確証を持ったのだと思われる。

これらの分析から、児童は 3 時間目の授業を経て、具体的な取り組みや工夫が不可欠だと気づき、記述に変化が生まれたと考えられる。これは、比較を通して臼杵石仏のイメージを持つことができ、これをもとに考えられるようになったためだと思われる。

(3)「(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習」についての分析

(ア)の手立ての中でも、人との関わりに目が向いていたが、なぜ保護されたのかについては触れていない。そのため、(イ)の手立てを講じた 8~10 時間目を通してどのような学びを得たのかの分析も必要である。8~10 時間目の記述と授業の様子から分析する。

①授業の実際

まず、題材に触れた際の児童の様子を分析する。仏頭問題について児童に提示する際、昔は仏頭が落ちており、復元されて現在の姿となっていることを伝えた上で、復元に反対する人々がいたことを伝えた。この時、多くの児童が驚きを示していた。これは、元に戻すべきだ、大切に保護すべきだ、という固定観念を裏切られたためだと思われる。これにより、思考が活性化され、何が大切なのか、どうしてそうすべきなのかといった、入り込んだ主張を考えられるようになり、保護・保全の取り組みの目的は、大切なものだからという理由だけではないことに気づいたと思われる。

②記述の比較

次に、授業を経た児童の変化を分析する。児童の思考過程を見取り、どのような学習から変化が生まれたのかを判断するため、個別の児童の記述を分析した。8 時間目に仏頭問題について知った上で記述した「自分はどちら派か」、9 時間目に新聞記事を読んだ上で記述した「討論会での自分の主張」、10 時間目の討論会を終えて記述した振り返りを用いた。欠席なく 3 時間の授業に出席した 16 名のうち、10 時間目の記述の中で、内容が討論会の感想にとどまっておらず、記述に富んだ、3 名の児童(d, e, f)の記述(資料 8)を用いた。

d 児は、8 時間目の記述では、元々の姿は頭がついた状態であり、見に来た人もがっかりしてしまう点を踏まえ、復元した方が良くいと主張している。9 時間目の記述では、観光に来た人ががっかりしてしまうという点に、岩が傷んで汚くなってしまうこと、復元しても

技術的に問題がないという 2 点を加え、復元した方が良いと主張している。この 2 点については、同様の主張が新聞記事に書かれていた。これは、見た人ががっかりしてしまうから復元すべきという当初の主張を補強するために、当時の復元保存派の人の意見を取り入れたためだと思われる。10 時間目の記述では、討論会の中で現状保存派の児童が行った「復元したら歴史が伝わらない」という主張に対して、元々の姿は頭が落ちていない姿であるという視点から、反対意見を述べている。これは、つくられた当初の姿に価値を見いだしているためだと思われる。e 児は、8 時間目の記述では、頭が落ちている姿は怖い印象を与えることと、偉い人物のような印象を受けるが頭がついている方がより偉く見えるため、復元した方が良いと主張している。9 時間目の記述では、頭が落ちていると仏様の姿に見えないため、復元すべきだと主張している。8 時間目と 9 時間目の主張に見られる違いとして、8 時間目では「偉い人」という言葉を使って書かれているのに対して、9 時間目は「仏様」という言葉に変わっている。復元保存派の「仏さま本来の姿に」という主張を取り上げた新聞記事があることから、自分の主張と似た主張をしていた、当時の人の言葉を借りたものだと思われる。10 時間目の記述では、現状保存派と復元保存派の両方に良いところがあるという気づきについて述べている。また、復元後に国宝に指定されたことを踏まえて、復元すべきだと主張している。f 児は、8 時間目の記述では、当時の人々が、頭が落ちている臼杵石仏の姿に愛着を感じている点を踏まえて、現状保存を主張している。9 時間目でも、当時の姿が定着している点を踏まえて、現状保存を主張している。8 時間目と 9 時間目の主張に見られる違いとして、8 時間目では「愛着」という言葉を使って書かれているのに対して、9 時間目は「定着」という言葉に変わっている。現状保存派の「今の姿でイメージが定着している」という主張を取り上げた新聞記事があることから、e 児と同様に自分の主張と似た主張をしていた、当時の人の言葉を借りたものだと思われる。10 時間目の記述では、討論会の中で現状保存派の児童が行った「頭が落ちている方がみんなが見慣れている」という、主張に対しての感想を述べている。また、頭を落ちたままにしておけば 700 年を超えるという主張も見られた。これは、復元保存派の児童が討論会の中で行った、頭が落ちたままの姿よりも本来の姿の期間の方が歴史が長いという主張に対して、自分の視点から反論をしたものだと思われる。

これらの記述から、3 時間の授業を通して、文化財の保護・保全の在り方に関する様々な主張や関わりを知ることのできた児童がいたと思われる。これにより、具体的な目的や行動を考えられるようになり、文化財の保護・保全に対する自分の視点をしっかりと定めることができたと考えられる。

5. 考察

(ア)の手立てを講じた授業の分析から、3 時間目の授業を経て、児童の記述の量や使われる単語の増加などが見られた。これには、臼杵石仏が壊れた姿のイメージを持ち、その具体的なイメージをもとに考えられるようになったことが関係していた。この具体的なイメージを持ったのは、比較を行った際の児童の様子から、身近な文化財である臼杵石仏と、これと対照的な磨崖仏 X の比較を行ったためだと考えられる。これらのことから、(ア)の手立てを通して、身近な文化財が失われた可能性を学び、具体的なイメージを持って文化財の保護・保全について考えられるようになるとと思われる。

(イ)の手立てを講じた授業の分析から、3 時間の授業を通して、文化財の保護・保全に対する自分の視点をもって、具体化された主張を考えられるようになった児童が見られた。これには、当時の新聞記事と討論会を通して、復元保存派と現状保存派の双方の人々の思いや行動を知ったことが関係している。また、具体化された主張を考えられるようになったきっかけとして、8 時間目の導入の際に、固定概念が裏切られ、思考が活性化されたことも関係していると考えられた。これらのことから、(イ)の手立てを通して、具体的な人の関わりについて学ぶことで、文化財の保護への自分の考え持ち、深めることができるようになると思われる。

6. おわりに

本研究では、身近な文化財の失われる危険性に気づかせるための手立てとして、(ア)身近な文化財と失われつつある文化財との比較と、(イ)文化財の保護・保全に関わる人の働きについての学習の2つの手立てを検討し、これを取り入れた授業実践を行った。この授業の中で児童は、(ア)の手立てを通して、文化財は失われる可能性のあるもので、残っているのには何かしらの要因があることに気づき、(イ)の手立てを通して、個々の視点を持ち保護・保全の取り組みへの考えを深める学びを行える可能性を示した。

これらのことから、本研究で講じた2つの手立ては、身近な文化財が持つ、失われずに残ったという価値やかけがえなさと、文化財の保護・保全について必然性への気づきを与え、当事者としての考えを持たせるものと思われる。これは、地域の文化財を通して文化財の保護の意識を育てる授業の手立てとして、有用であることも示している。

ただし、本研究は一部の児童の記述をもとにした分析にとどまっている。今回の手立てを通して得られた結果が、クラス全体や他クラスにおいても得られるかの検証が必要である。また、本研究はあくまで、身近な文化財である臼杵石仏を事例とした学習である。地域には臼杵石仏以外にも、多くの文化財が所在している。それらの文化財も、教材として学習した文化財と同様に、失われる危険性のある文化財である。そのため、今後の課題として、2つの手立てを通して得た気づきや考えを、他の文化財に対しても抱けるか、教材として扱われた文化財以外の、失われる危険性にも気づける手立てとはどんなものかについて検証していきたい。

注

(1) 臼杵石仏については、九州文化財計測支援集団が作成した、古園石仏の三次元モデルが Skechfab にて公開されているため、これを利用した。磨崖仏 X は、平嶋ほか(2024)の手法をもとに筆者が作成し、Skechfab にて公開している三次元モデルを利用した。

(2) 臼杵石仏を構成する4つの石仏群の1つ。

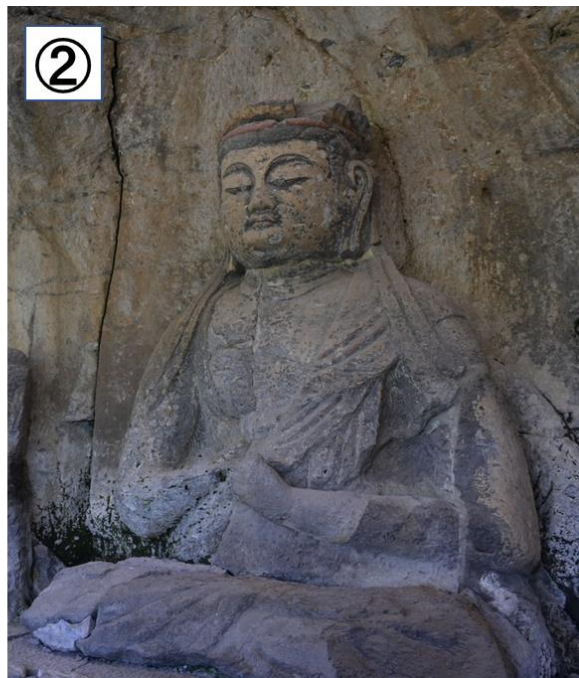
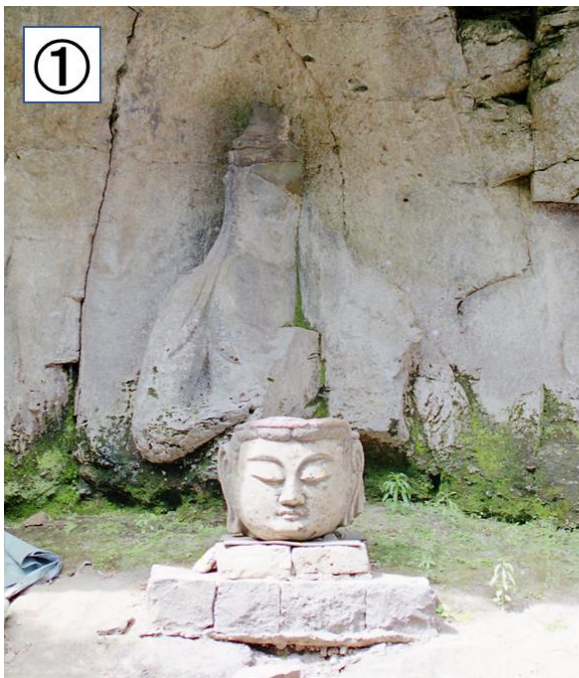
(3) 本研究における分析データ等の取扱いに関しては、授業実践に参加した児童とその保護者から、研究データの使用及び著作者人格権を行使しないことについて同意を得ている。匿名化の処理を行い、A 小学校の確認の上で掲載許可を得たものを使用している。

引用・参考文献

新宮済，中澤静男(2023)「文化財を生かした小学校における ESD 社会科創出の一方法：小

- 学校 4 年生社会科『県内の文化財や年内行事』の実践から』『ESD・SDGs センター研究紀要』第 1 巻, pp.19-29
- 伊藤大輔, 寺西望, 木村竜也(2023)「総合的な探究の時間で生徒は何を学んだか?:振り返りシートの計量テキスト分析の試み」『日本教育工学学会研究報告集』第 2023 巻第 1 号, pp.215-222
- 大分県教育委員会(2021)「大分県文化財保存活用大綱:地域とともに生かして守る大分の文化財」
(URL:https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/2134960_3217764_misc.pdf(最終閲覧日:2024 年 12 月 31 日))
- 國竹真由美(2017)「地域文化遺産に基づいた『世界遺産教育』の有効性:熊本県宇城市における『伝統文化学習』の事例研究」『世界遺産学研究』第 5 号, pp.22-47
- 田渕五十生, 中澤静男(2007)「ESD を視野に入れた世界遺産教育:ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか」『教育実践総合センター研究紀要』第 16 巻, pp.59-66
- 中澤静男, 田渕五十生(2006)「奈良における世界遺産教育:シルクロードの文化を中心に」『教育実践総合センター研究紀要』第 15 巻, pp.145-154
- 松岡靖, 佐伯陽, 志田正訓, 中丸敏至, 由井義通, 樋口聡(2014)「グローバル化に対応した附属小型 ESD カリキュラムの開発研究:世界遺産学習『宮島』の開発を通して」『学部・附属学校共同研究紀要』第 42 号, pp.39-48
- 樋口耕一(2004)「テキスト型データの計量的分析:2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』第 19 巻第 1 号, pp.101-115
- 樋口耕一, 中村康則, 周景竜(2022)『動かして学ぶ!はじめてのテキストマイニング:フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 平嶋拓人, 小山拓志, 土居晴洋, 河野晋也(2024)「磨崖仏における三次元モデル作成手法の構築と検証」『大分大学教育学部研究紀要』第 46 巻第 1 号, pp.1-16
- 文化庁「文化財」
(URL:https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/index.html#block_04(最終閲覧日:2024 年 12 月 31 日))
- 森屋雅幸(2019)「子ども・若者の文化財保護の実態について:『文化財愛護少年団活動』を中心に」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』第 5 号, pp.59-68
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説社会科編』
- 文部科学省(2021)『今, 求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(小学校編)』
- 祐岡武志, 中澤静男(2012)「世界遺産教育における教材化と教育実践のあり方:『法隆寺地域の仏教建造物』と『木の文化』の視点から」『奈良教育大学紀要』第 61 巻第 1 号, pp.239-150

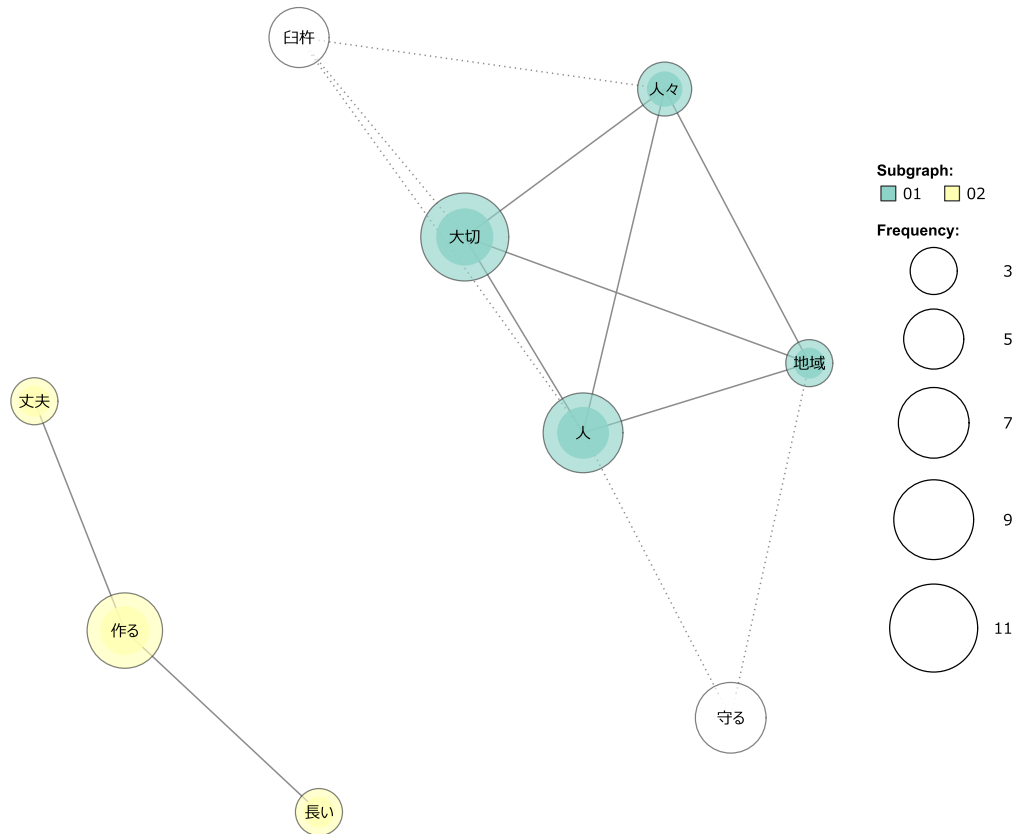
資料 1 古園石仏の復原前の大日如来像 (①臼杵市教育委員会蔵)
と現在の大日如来像 (②筆者撮影)



資料 2 単元計画

時間	毎時のテーマ	内容
1	臼杵石仏って何だろう	<ul style="list-style-type: none"> ・自慢できるものが多い中で、臼杵市の観光 PR キャラクターのモデルに臼杵石仏が選ばれていることを知る ・臼杵石仏の何が自慢なのかを考える
2	1000 年残っている臼杵石仏	<ul style="list-style-type: none"> ・約 1000 年もの間残っていることを、年表を用いて学習する ・どうして残ることができたのかを予想する
3	他の石仏と比較してみよう	<ul style="list-style-type: none"> ・臼杵石仏と磨崖仏 X を比べて、それぞれの姿の特徴を見つける ・どうして臼杵石仏が残ることができているのか再度予想する 教材：臼杵石仏と磨崖仏 X の写真と三次元モデル
4 ～ 7	臼杵石仏・歴史資料館の見学	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史資料館で臼杵と臼杵石仏の歴史を学ぶ ・臼杵石仏を観察する
8	臼杵石仏の今と昔	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の臼杵石仏の様子や、現地に置かれていた写真等から、昔はボロボロで復元によって今の姿になっていることを知る ・古園石仏の頭を戻す際に、論争があったことを知り、自分だったらどう思うかを考える 教材：動画・新聞記事
9	討論会の準備をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・約 30 年前の仏頭の復元に関する新聞記事から、「現状保存派」と「復元保存派」の思いを知る ・新聞記事をもとに、討論会での自分の主張を考える 教材：新聞記事
10	「臼杵石仏仏頭問題」大討論会	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に用意した主張をもとに、「現状保存派」と「復元保存派」に分かれて、討論会を行う
11	討論会の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の人々がどんな思いを持っていたのか振り返る ・改めて、臼杵石仏が残ることができた理由を予想する
12	1 学期の学習の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・1 学期を通してどのようなことを学習したのかを振り返る ・現在はどんな保護・保全のための取り組みが行われているかを調べる
13	臼杵石仏の今を聞いてみよう	<ul style="list-style-type: none"> ・臼杵石仏の保護・保全に関わっているゲストティーチャーから、現在行われている取り組みについて伺う ・臼杵市の文化・文化財課の方をお呼びする
14	どうして知ってもらいたいのだろう	<ul style="list-style-type: none"> ・臼杵石仏のことを伝える活動が、なぜ行われるのかを考える ・伝えられなかったらどうなるかを予想する
15	身近にある、私たちが伝える文化財	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財が失われる原因について、他の磨崖仏を通して学ぶ ・臼杵石仏を残していくためにどうしたらいいかを考える ・学校の校区や地域にある大切なものや文化財を調べる

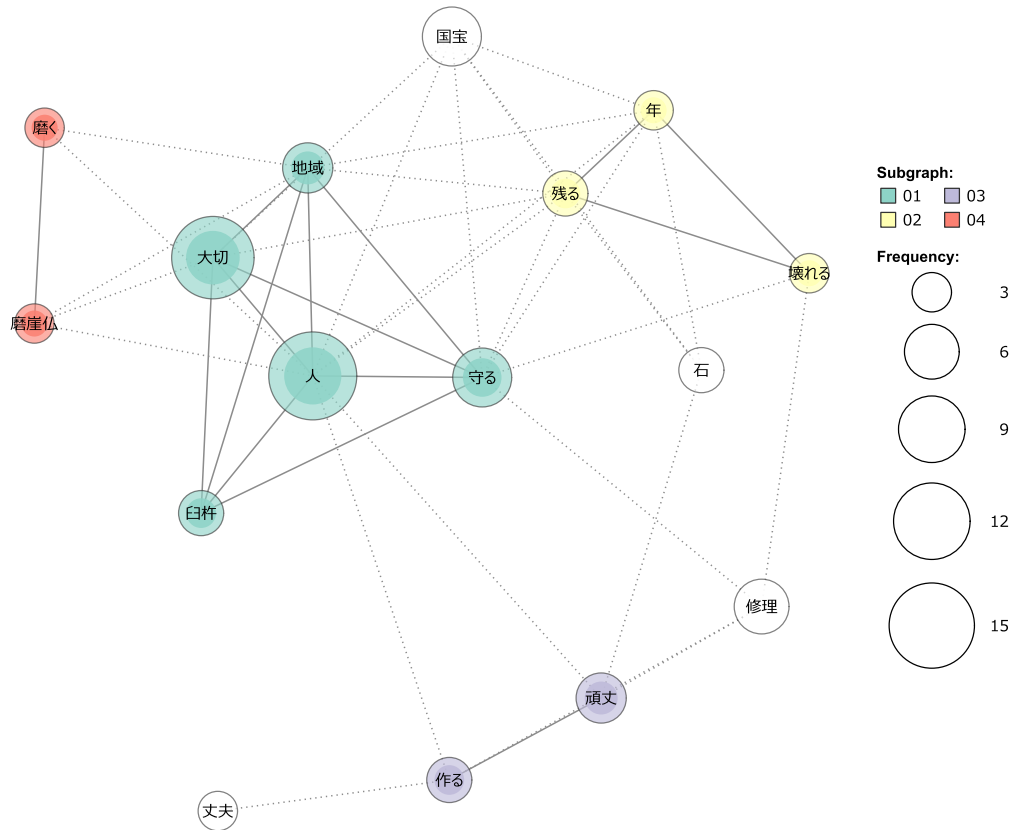
資料3 共起ネットワーク 2時間目 (n=23名)



資料4 サブグラフの話題の解釈と記述例 2時間目

番号	話題・記述例
1	人々が大切にしたから 「臼杵の人が大切にしていたから」「地域の人が守っていたから」
2	つくり方のおかげ 「丈夫に作ったから」「作ったときに長くもつようにしたから」

資料5 共起ネットワーク 3時間目(n=24名)



資料6 サブグラフの話題の解釈と記述例 3時間目

番号	話題・記述例
1	人々の取り組み 「臼杵の人が守ったからだと思います」「地域の人が大切にしてきたから」
2	壊れても直して残った 「壊れたら、修理をしたりして守ってきたから」
3	素材やつくり方 「頑丈な岩や石でできているから」「なぜなら丈夫に作ったから」
4	名前からの連想 「磨崖仏の磨は、磨くと一緒なので地域の人磨いたりしていた」

資料7 児童の2時間目と3時間目の記述

	2 時間目	3 時間目
a	人々が大切にしてきたから。	壊れたら、修理をしたりして守ってきたから
b	地域の人が守っていたから。	臼杵石仏が、1000 年もの間、残ったのは、地域の人たちがずっと守ってきたからだと思います。例えば、壊れかけていたら直したりしていたと思います
c	みんなが大切にしているから 作る時にすごく頑丈にしたから	頑丈につくったからだと思います。なぜなら頑丈に作ったら修理もいらないからです。

資料8 児童の8・9・10 時間目の記述

	8 時間目	9 時間目	10 時間目
d	元々は頭がちゃんとついていたんだし、石仏を見にきた人がいたときに頭が落ちていたらガッカリするかもしれないから。元々の姿でいろんな人に見てもらいたいから戻した方がいいと思う。	戻した方がいいと思う。仏様の首がなかったら観光に来た人とかがっかりするかもしれないし、岩が傷んでしまったら石仏に苔が生えてしまったりして汚くなってしまうから・仏頭を胴体に戻した時はよほどのことがない限りは何十年も持つと考えられているから戻さないよりも戻した方がいいと思う。	私はあまり発言できなかったから、次またある時は発言したいです。歴史が伝わらないというのはもともとは頭がちゃんとついていたからもどさない意見には私は反対だなと思いました。
e	落ちたままだったら見ていて怖いから頭がついているほうが安心できる。偉そうな人なのでくっついている方が偉く見える	理由は、顔が落ちていたら、仏様の姿に見えないからです。	そのままの意見もふくげんの意見もりょう方がいいところがあるなあと、とうろん会をして思いました。私は、ふくげんして国ほうになったので、ふくげんしたほうがいいなあと思いました。
f	愛着があると言っていたから	頭が落ちている姿が定着している。	頭が落ちている方がみんなが見慣れているという意見がいいと思いました。頭がついている石仏は700 年だけど頭をほうちしておけば700 年こえると思う。